

目次

序 1

第一部 平安時代中期の仮名文——源氏物語——

構文にかかわって

第一章	朝顔の卷「かしこくも古 ^ふ りたまへるかな」——「かしこく」考——	5
第二章	動詞終止形の反復用法「泣く泣く」	26
第三章	横笛の卷の冒頭「悲しさを飽かずくちをしきものに」の構文	47
第四章	花宴の卷「うち誦 ^ず じて、こなたさまには来るものか」	58
第五章	幻の卷の「ありがたくめでたく」考——最晩年の光源氏——	69
	語彙・語法の面から	
第六章	類義語「生ひ出づ」と「生ひ立つ」	77
第七章	浮舟の卷「つひに今のをば殺してしぞかし」——「殺す」考——	105
第八章	源氏物語の「おほいどの」考	113
第九章	笑われる姫君、近江の君の言葉遣い	127

第十章	人物呼称「姫君」——特に浮舟の場合……………	135
第十一章	手習の巻と伊勢物語・惟喬親王の章段……………	149
	和歌表現との関係……………	
第十二章	副詞「つゆ」の用法……………	160
第十三章	末摘花の巻「山里のこちちしてもものはれなるを」……………	184
第十四章	須磨の巻の「つま」の用法……………	195
第十五章	常夏の巻「撫子を飽かでもこの人々の立ち去りぬるかな」……………	207
第十六章	「しじろもどろ」考……………	215
第二一部	平安時代前期の仮名文——竹取物語、古今和歌集、土左日記——	
第一章	竹取物語の会話表現——天人の会話の人物呼称……………	227
第二章	古今和歌集の「ずして」と「で」の用法……………	239
第三章	土左日記の接続助詞「て」の用法……………	251
第四章	土左日記の文体——「で」「ず」「ずして」を使った構文から……………	272
第三部	平安時代後期の仮名文——更級日記——	
第一章	更級日記の冒頭と源氏物語の浮舟……………	291

第二章	更級日記巻末の「蓬の露」の歌——源氏物語との関係から……………	313
第三章	更級日記の語「昔の人」をめぐって……………	324
第四章	更級日記の語「山里」——源氏物語との関係から……………	340
第五章	更級日記の「砂子」考——湘南の浜の白い砂……………	355
第四部	平安時代の仮名文を通じて	
第一章	仮名文における「飽かず」の用法……………	369
第二章	「砂」を意味する語の消長——「いさゞ」「すなゞ」「まさゞ」「すな」——	391
第三章	歌語「まさゞ」（真砂）の変容……………	411
	本書と既発表論文との関係……………	433
索引	……………	437
あとがき	……………	443

第一章 朝顔の巻 「かしこくも古りたまへるかな」

——「かしこく」考——

一 はじめに

朝顔の巻のはじめの方で、女五宮に対して光源氏が「かしこくも古りたまへるかな」と思う箇所がある（新潮日本古典集成『源氏物語』石田穰二・清水好子校注、一九〇頁。本文引用も同書による。以下も同様）。それは女五宮が年老いてしまったことに対して述べたものであるが、その「古りたまへるかな」に上接する「かしこくも」の意味については、解釈が定まっておらず、およそ次の三つの解釈がある。

その一つは、「かしこく」が形容詞「かしこし」の連用形になっていることから、それを程度副詞的に使っていると見て、「古りたまへるかな」を修飾し、程度がはなはだしく、非常に、とても、の意ととって、女五宮が年老いたことを強調した言い方と見る見方である。

二つ目の解釈は、「かしこし」の本来の意味である、おそるべき存在を前にして恐怖し、畏敬する意味がここでも使われていると見る見方である。

前者の解釈としては、『源氏物語辞典』（北山翁太）、『日本国語大辞典』（「かしこくも」の項で、その箇所を引用して）などがある。

後者としては、古注釈で、契沖の『源註拾遺』が『此かしこくはまことにおそろしく見ゆるまでふりたまへるなり』（『契沖全集』）と注し（雅言集覧の「かしこく」の項もその記述を引く）、現代の注釈では、日本古典文学大系